
バカと転生者と召喚システム

FORCE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと転生者と召喚システム

【Nコード】

N5292Z

【作者名】

FORCE

【あらすじ】

『バカとテストと召喚獣』に転生した『斬沢 拓哉』が原作キャラクターたちと楽しく？学校ライフを送っていきます。・・・多分

プロローグ

俺は『斬沢拓哉^{きざわたくや}』。今はともありえないことが目の前で起こっている。

それは、真っ白な部屋に汚いひげを生やした自称神様がいることだった。

「それで俺はその神様の間違いでここに来てしまった。ということか？」

「恥ずかしいことじゃがそうなるのう」

俺はここに来る前にお魚加えた野良猫がトラックに轢かれそうになったところを俺が飛び込んで、結果、お魚加えた野良猫が生き残り・

・・・俺が死んだ

そして現在に至るそうだ。それより

「俺はこの後どうなるんだ？自称神様」

「わしを自称神様と言っんじゃないぞ！・・・まずは謝罪として生き返させてやろう」

マジで！？

「俺を生き返させてくれるんですか！？」

そうしたら俺はいろんな人に拝められるんだろうな
トラックに轢かれても死ななかった人ゝみたいな♪

「と言っても、お主が生き返ってもお主の体はもう焼かれておるぞ」

自称神様はどつかから取り出したテレビを俺に見せる

テレビに映っているのは火葬場で俺が焼かれていて、両親が泣いている場面だった。

「くッ！もうここまで王手が指してあるとは……こいつらやりおる」

「お主が野良猫の代わりに死ぬのが悪いぞ！？」

もしかして俺が悪いのか？自称神様がそう仕向けたくせに！

「それじゃあ俺はどこに行けばいいんだ？」

「とにかくじゃ、お主が行くのは、『バカとテストと召喚獣』に行つて貰うのじゃ」

バカテストか……。原作は一応知っているけど……。本当に大丈夫なのか？

「神様とやらは俺にその世界で生きていけというのか？というより生きていけるのか？」

「お主ならいけるじゃろうな？」

ちよつと待つんだ！そこで疑問詞はおかしい！！ということは俺は原作キャラに会わなくてお陀仏になってしまう確立があるということなのか！？

「大丈夫じゃそこまで心配はしなくていいのじゃ」

自称神様いわく大丈夫らしいんだが不安でたまらない……。つとなると俺は転生者になるのか……

「一応じゃが能力はどうするかのう？お主に決めさせようではないか」

なんて上から目線な発言なんだ！！

一応転生をしてくれると言っているがそれがなかったら俺は本気で殴りかかっていたところだ。

「神様にお任せするよ」

「無欲な奴じゃのう・・・他の奴は『頭を良くしてほしい』とか『イケメンにしてほしい』じゃとか『金持ちの家に住みたい』とか言ってくるんじゃないかな・・・」

「それじゃそんなことを言っしてほしいのか？」

「いや神様として頼ってほしいのじゃが・・・まあいいのじゃそれでは行くかのう」

えっ！それは今から転生するって言うこと？横暴すぎるよ！

「ちょっと待つんだ！俺の気持ちの整理がまだ整っていない！」

「大丈夫じゃ転生するときはこのボタンを押してからじゃ」

自称神様はポケットから変なボタンを取り出した。

ということは俺の命はあの自称神様の手の中つということなのか！？

「そろそろワシの名前から『自称』を消してほしいんじゃないか？」

あれ？俺の心の中読める？

自称・・・じゃなくて神様？

「あらためてバカテスに行ってこいなんじゃない！」

神様はボタンを押すと俺の足場がなくなっていた。
神様がこんなことをやって良いのか？

「神様だからできたこと」

「てめえ！楽しんでるだろ」

そうその会話が俺が穴に落ちるまでの会話だった。

「うわああああああ！」

えーと・・・これは何て言うんだっけ？

そうであれだ！

「理不尽だーーーー！！」

ということで、高校生になって二度目の春がやってきた。
もちろん舞台は文月学園だ。

「なんて長かったんだ・・・今までの生活・・・」

今までを思い起こすといろんなことがあった。

さすがに0歳からやっていくのは長かった。というより長すぎじゃないのか！？

「まったく・・・神様は能力について説明は無いしどうやって生き

て行けばいいのかわからんようになってきたぞ」

俺が一人でブツブツいつているなか文月学園の校門が見えた。
もちろんその校門には・・・

「斬沢、遅刻だぞ」

そこには拷問が待っていた・・・

じゃなくて西村という名のオマージュに包まれた鉄人だった。

「そこで嫌な顔をするな！・・・・・・たく受け取れ」

「はい」

俺は鉄人・・・

「斬沢、それ以上あだ名を言うとは補習だぞ」

「あれ？俺の心の中を読み取れるんですか？」

「ということは俺をあだ名で呼んでいたわけだな？」

あつ！はめられた！

じゃなくて俺はにしまる・・・鉄人から振り分け試験の手紙をもらった。

もちろんラブレターではない。むしろラブレターだったら失神して死んでいるところだ。

「斬沢、お前は本来Cクラスには行けただろうが――――」

俺は振り分け試験の結果を見るため開けてみると・・・・・・

「何でお前は振り分け試験の日にちを一日間違えたんだ？」

Fという大きな文字が俺を迎えてくれた。

プロローグ（後書き）

この小説で2作目になってしまいました！

こっちの『バカと転生者と召喚システム』ほうが良いという意見が多いのならば、最初に書いた小説は多分更新しませんかもですね。作者的にはこっちのほうがやりやすいですね。

まあがんばっていきますので、よろしく願います！

オリ主設定！！

名前 斬沢きりざわ 拓哉たくや

性別 男

身長 178cm

体重 56kg

容姿 茶髪に赤い目

設定

斬沢は神様？の所為でバカテスの世界に転生される。

家族の構成は三人家族であり、両親は海外にいるため家に居るのは拓哉一人

家は明久と同じマンションで部屋が隣にある。

小学校で姫路瑞希と出会い、中学校では坂本雄二と喧嘩つながりで出会う。

学力は暗記系統は良く、その他はFクラス並

振り分け試験では、振り分け試験の日にちを一日間違えてしまいFクラスにいつてしまうことになる。

第一問

Fクラスに行く途中・・・

Aクラスを覗いてみた。

すると、ノートパソコンに個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートが完備されていた。

「なんてバカに豪華クラスなんだ・・・」

原作でAクラスは豪華だと記していたが・・・本当にここまでやるか？

となるとFクラスは・・・考えない方がいいかも
そして聞き覚えのある声が聞こえる。

「あれ？拓哉？そこで何してんの？」

原作の主人公、吉井明久だった。

「おう明久か、・・・今はAクラスの設備を見て落ち込んでいたところだ。覗いて確かめるか？」

「当たり前さ」

明久がAクラスを覗く

「なんて豪華なんだ・・・」

明久の声がAクラスに聞こえたのか、Aクラスの人たちがコツチを見続けている。

「……………明久、覗くのは止めようみんながこっちを向いている」

「あ、うん分かったよ」

俺達はAクラスを後にした。

そして今は、Fクラス前に到着

「……………ねえ拓哉」

明久が拓哉にFクラスをみて感想を聞きたいそうだった

「ああわかってている……………。にしてもここは学校なのか？」

Fクラスはもう廃屋のような部屋だった。教室という原型をはるかに下回っていた。

「それより入るよ拓哉！……………すいません！ちょっと遅れました」

「早く座れうじ虫野郎！」

明久はFクラスに入った途端に罵倒される。

さすがだ明久！早くも罵倒されるだなんて明久しかいないな！

にしても誰が明久に向かって言ったんだろうな？

俺はFクラスの入ってみた。

「遅れました。明久がうじ虫に関しては否定しません」

「ちよつと拓哉！さりげなく僕をバカにしたな！」

さりげなく？俺はストレートに言ったはずだが？

そして俺は、Fクラスを見渡す。すると教壇にある神童が立っていた

「で？何で雄二にいるんだ？」

「一応このクラスの代表だからな。それにしても拓哉は別のクラスじゃないのか？」

「振り分け試験の日にちを一日間違えた」

Fクラスみんなが哀れな視線で俺を見てくる。
見ないで！そんな目で俺を見ないで！

「拓哉も明久と同類なバカだな・・・まあいい戦力が少しでも上がったことには変わりが無いからな」

「明久と一緒にバカにされたのは気に食わんが、戦争については任せろ！」

「ねえ拓哉・・・また僕をバカにしたな？」

当たり前だ！明久は真正銘のバカだ！

そこにFクラスの担任なのかは知らないがある教師がFクラスに入ってくる。

「席についてもらえますか？HR始めますので」

席？そんなの俺が知るはずが無いが？

「先生、俺の席はどこですか？」

「決まっています」

えっ！マジで！決まってるの！？

「明久はどこに座る？」

「うーん、僕は窓側にすわるかな」

明久は窓側の一番後ろに座った。
そして俺は明久の隣に座った。

「えー、おはようございます。2年Fクラスの担任の……」

福原先生が黒板に自分の名前を書こうとしてチョークを探し始める
チョークすらなかったら勉強はどうやっていくんだ？
というよりこんな設備に泣けてくるぞ

「福原慎です。よろしくお願いします」

えー、チョークは無かったらしい……

「卓袱台に座布団、えー……不備があれば申し出てください。必要な物があれば極力自分たちで調達してきてください」

不備？このクラスの全体が不備だと思うんだが？

「では、廊下側の人から自己紹介をお願いします。」

自己紹介か……明久がどう出るかが見ものだな
廊下側の人が立ち上がる

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる」

美少女……じゃなかった美少年の秀吉だった。

「今年一年よろしく頼むぞい」

こうして秀吉の自己紹介が終わった。
そのあと、小柄な人が立ち上がる

「・・・・・・・・・・・・・・・・土屋康太」

短いな！？つというよりカメラがポケットから顔を出しているが？
それにしてもこのクラスは見渡す限り男子だけのクラスなのか？
と思っっている中女子の声が聞こえる

「島田美波です。海外育ちで日本語の読み書きは苦手です。趣味は
吉井明久を殴ることです」

「あう島田さん・・・・・・・・」

その女子とは島田だった。

それと明久、女子から声をかけてもらっているのになぜ嫌な顔をす
る？

えーと島田の次は・・・・明久か

「吉井明久です気軽に『ダーリン』ってよんでくださいね！」

そうかそう呼んでほしいんだな？

『ダアアーリイン！！』

Fクラスの大合唱w

明久の自己紹介はFクラスの人たちの心たちをつかんだと思うよ！
で、明久の次は・・・・俺か

「えゝ斬沢拓哉だ。さっきのバカと幼馴染だよろしく！」

俺は簡単に自己紹介を終わらせた。
自己紹介って短文がいいよね？

そのときある女子の声が聞こえる

「あの・・・おくれてすいま・・・せん」

その声の主を探すとFクラスの入り口に立っていたのは――

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん
もお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

――立っていたのは学力で第三位に入っている姫路瑞希だった
って学力三位がFクラスにいつ！

「で、では一年間よろしくお願いしますっ！」

緊張をしていたのかちよつと噛んだと思うが？
そしてその人物に声をかける

「ところで姫路、体調は大丈夫なのか？」

雄二が体調を聞いていた。

確か、姫路は体調不良で早退だったっけ？

「あ！それは僕（俺）も気になる！」

明久も姫路の体調が心配だったらしい

「き、斬沢君！？それに吉井君も」

なんだろう・・・俺は声をかけたらいけなかったかな？
けど体調が気になったので声をかける

「それで体の方は大丈夫なのか？瑞希」

「あ、は、はい大丈夫です。」

明久は瑞希に無視されたのが傷ついたのか落ち込んでいるな

「はいはい、その人たち静かに」

俺達は福原先生に注意される。

そして福原先生が教卓をバンバンと叩くと

バキッ

ガラガラガツシャーン

教卓が大きな音を立てて崩れていった。

「替えを持っ てきますしばらく待っていてください」

俺は改めて、なんでFクラスになったのか絶望している。

えゝと O T L ↑こんな姿勢で

そのとき明久と雄二がこの教室を出て行く

何を話していたのかは知らないが俺達は福原先生が戻ってくるまで
秀吉たちと雑談していた。

変えの教卓が用意され自己紹介が難なく進み最後の雄二の番になる。

「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」

そう言つて、雄二が教壇に立つた

「Fクラス代表の坂本雄二だ。オレのことは代表とでも坂本とでも、好きなように呼んでくれ」

Fクラスみんなが雄二に注目する

「さて、みんなに一つ聞きたい、カビ臭い教室・古く汚れた座布団・薄汚れた卓袱台・・・Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・」

一呼吸開け、みんなの心に聞いた

「・・・不満はないか？」

『大ありじゃつつつ！？』

2年Fクラス全体の心の底からの叫び、俺は叫んだりはしなかった

が気持ちは一緒だ。

布団を持ってきたら寝れそうなスペースがあるがAクラスの設備を見たら当たり前だ。

「だろう？オレだってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。」

雄二の言葉に不満が次々と出てくる。

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！』

「そこで代表としての提案だが、FクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けたいと思う！」

雄二はAクラスへの『試験戦争』の引き金を引いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5292z/>

バカと転生者と召喚システム

2011年12月18日12時47分発行